

金大 枯れ葉剤影響研究グループ

ベトナムの母子支援

金沢大の城戸照彦客員教授（衛生学）を中心とする研究グループは、ベトナム戦争中に米軍などが散布した枯れ葉剤によって汚染された地域で、低体重児に対する健診や健康指導の方法を現地の人に伝える活動を始めた。二十一日に金沢大角間キャンパスで開始式があり、城戸客員教授らが活動への意気込みを語った。（小佐野慧太）



合意文書を披露する城戸照彦客員教授（左）と山崎光悦学長（中）、菊地和彦所長（右）＝金沢大角間キャンパスで

研究グループは二〇〇二年からベトナムで枯れ葉剤の影響を調査してきた。これまでの研究で、女性の母乳に含まれるダイオキシン類の濃度が高い地域ほど、低体重児が多くみられることを突き止めた。活動では、現地で健診を行い、ダイオキシン類の濃度の高い母乳を飲んで低体重児がいたら、早い段階の離乳を求めていく。研究グループがなくても健診や健康指導が続けられるよう、現地の医療関係者を金沢大に招くなどしてダイオキシン類やホルモンの精密検査の方法を伝える。

JICA委託 低体重児健診など指導

活動をやる地域は、戦争中に米軍の基地が置かれ、枯れ葉剤散布の拠点となったベトナム中部のビンディン省フーカット県。低体重で生まれる新生児の割合が他地域の三倍の12%に上る。城戸客員教授は「枯れ葉剤の影響をなくす土壌改良をしても、被害は何十年も継続する。質の高い母子保健活動をベトナムで展開したい」と話した。今月三日にベトナムの医療関係者と初回の打ち合わせをしており、「現地の期待は大きいと感じた」と振り返る。国際協力機構北陸センター（JICA北陸）の委託事業として、三年間で八千二百万円の事業費を受けた。開始式では、金沢大の山崎光悦学長と、JICA北陸の菊地和彦所長が合意文書を報道機関に披露した。菊地所長は「ベトナム戦争の終結からまもなく半世紀になるが、多くの人が枯れ葉剤の影響に苦しんでいる。今回の活動がベトナムの子どもたちに大きく貢献することを期待している」と話した。

ベトナムでの事業について発表する（左から）城戸照彦客員教授、山崎光悦金沢大学長、菊地和彦JICA北陸センター所長＝金沢大学で



金沢大とJICA ベトナムで事業

金沢大とJICA（国際協力機構）北陸センターは21日、ベトナム戦争時に使用された枯れ葉剤の汚染地域で、低体重児の発育改善を図るプロジェクトを始めると発表した。現地の医療関係者らの人材育成を支援し、ダイオキシン濃度の高い母乳を飲んで低体重児を特定し、母子への栄養指

導などを行える体制を整える。事業は2022年7月までの3年間で、事業費は約8200万円。公衆衛生学が専門の城戸照彦・同大客員教授の研究グループが実施する。城戸客員教授は、01年度からベトナムでダイオキシンの含む枯れ葉剤の人体への健康影響について疫学研究を実施。戦後40年以上がたっても汚染地域に暮らす女性の母乳中のダイオキシン濃度が高いことや低体重児の発生が多いことなどを解明してきた。今回はこうした研究成果を踏まえ、ベトナム中部のフーカット県で、乳児約3000人と母親を対象に実施する。同大で記者会見した城戸客員教授は「長年の追跡調査で得た成果を、広く現地に還元していきたい」と話した。

【阿部弘賢】

枯れ葉剤影響児 支援へ



低体重児の発育改善ベトナムで事業開始
金大とJICA
金大と国際協力機構（JICA）は21日、ベトナムで3年間実施する低体重児の発育改善事業をスタートさせた。開始式が同大で行われ、関係者がプロジェクトの成功を誓った。プロジェクトはJICA

の委託を受けて金大が実施する。ベトナム戦争時に枯れ葉剤で汚染された地区では2500名以下の低体重出生児が多いとされ、現地の母子の健康促進に取り組みほか、医師、看護師ら医療スタッフを育成する。ベトナム南部の県を対象に現地の医療機関や大学などと連携。約3千人の乳児とその母親に対し、母乳中のダイオキシン濃度を測定して母乳を促したり、乳児の唾液中のホルモンを検査して栄養指導したりする。開始式ではプロジェクトマネジャーを務める金大の城戸照彦客員教授のほか、山崎光悦学長、菊地和彦JICA北陸センター所長が抱負を述べた。